

フレデリック・フランソワ・ショパン(1810～1849)、ポーランド生まれの、ロマン派時代を代表する作曲家の1人で、39年の短い生涯のほとんどをピアノ曲の作曲に捧げ、ピアノの詩人と呼ばれています。バラードは元々、物語風の内容を持った声楽曲に使われていた用語でしたが、19世紀初め頃から器楽曲として使われ、最初に芸術作品としてバラードを作ったのはショパンと言われています。4曲のバラードは、どれもポーランドの詩人ミッキエヴィチの詩から靈感を受けて作られたと言われています。詩から受けた主観的情緒を、抽象的に表現し、その形式は自由で、伝統や慣習に全くとらわれず、独創的です。4曲に共通しているのは全てが6拍子ということです。そして、この4曲はショパンが20歳代後半から30歳代の創作力盛んな時期に作られた傑作です。

バラード第1番 ト短調 作品23

1831年から1835年に作曲、構成はソナタ形式の変形のようなのですが、自由で若い息吹を感じさせる情熱的な楽想、壮大な構想。当時としては大胆で斬新な調性の移行もあり、劇的な展開から何かを物語っているような趣があります。それがこの第1番がバラードの中で一番ポピュラーな曲なのかもしれません。

バラード第2番 ヘ長調 作品38

1836年作曲、1839年マジョルカ島滞在中に手が加えられました。構成は2部構成で、穏やかで诗情豊かな部分と対称的な荒々しい嵐のような部分が交互にあらわれ、主調がヘ長調であるにもかかわらずコードはイ短調でそのまま終わるといふ大胆な創意がみられます。

バラード第3番 変イ長調 作品47

1840年～1841年夏に作曲、構成は一種のソナタ形式と考えられた曲です。他の3曲に較べると、全体的に明るく、洗練された華麗さと優雅さを持っています。1番と並んでポピュラーな曲のひとつです。

バラード第4番 ヘ短調 作品52

1842年に作曲、構成はソナタ形式に変奏曲形式やロンド形式の要素を取り混ぜた自由な形式です。きわめて抒情的で、同時に瞑想的でもあり深い内面性が感じられます。4曲の中では最も高度な曲で、技術的で、ピアニステックな華麗さが盛り込まれた曲です。

～～～休憩～～～

セルゲイ・ヴァシリエヴィチ・ラフマニノフ(1873～1943)ロシアのピアニスト、作曲家、指揮者。苦学してモスクワ音楽院のピアノ科と作曲科を学び、その後アメリカに渡り演奏活動を続け、ピアノの可能性を最大限に引き出すことを追求し、技巧に終始することなく、哀愁、情熱を宿した美しい旋律で後期ロマン派の色彩と叙情性を継承しています。ラフマニノフは前奏曲 作品3-2、10の前奏曲 作品23、13の前奏曲 作品32をのこしています。これらの計24曲の作品は、それぞれ異なった調性でかかれています。作品23からおおよそ7年後にあたる1910年に、モスクワで作曲された。作品23と比較すると、近代的な手法の影響もみられますが、基本的には情緒的な性格をそのまま受け継いでいます。

13の前奏曲作品32より 第5番. ト長調 / 13 Preludes 作品32-5 G dur モデラート

穏やかな雰囲気左手の分散和音にのせて、右手で美しい旋律を奏で、細かい音の動きは鳥の声を模しています。全体的に静かだが、華やかなカデンツァも印象的で、広く愛奏されている魅力的な作品。ラフマニノフの録音も残っています。

13の前奏曲作品32より第10番. 口短調 / 13 Preludes 作品32-10 h moll レント

悲しみを感じさせるような旋律がゆったりと静かが歌われ、しだいに音量を増していき中間部では、和音が重ねられ、非常に壮大で豊かな音色が求められます。また後半でみられる長大なカデンツァがうみだす音響は、幻想的な雰囲気をつくりだしており、印象的です。

13の前奏曲作品32より第12番. 嬰ト短調 / 13 Preludes 作品32-12 gis moll アレグロ

前奏曲集の中で最も広く親しまれている傑作の一つ。雪でおおわれた大地をソリが鈴を鳴らしながら走る様子を表しているといわれ、テンポが劇的に変化するのが特徴です。全曲を貫くめまぐるしい分散和音に対して、旋律は豊かな音で、たっぷりと歌っています。

セルゲイ・セルゲーエヴィチ・プロコフィエフ（1891～1953）20世紀のロシア／ソヴィエト連邦を代表する作曲家の一人。ピアニストとしても活躍しています。幼少の頃から作曲をし、ロシア革命で米国に亡命したが、のちに帰国。作風は独特のモダニズムと叙情性を持っていて、生涯に多くのピアノ作品を書き、5作のピアノ協奏曲や9曲のピアノソナタを残していますが、第6番から第8番までの3曲の「戦争ソナタ」は、プロコフィエフのピアノソナタの中でも演奏されることの多い、円熟期の作品です。この第6番のソナタは3曲の戦争ソナタの中で、唯一4楽章形式で書かれており、また9曲のピアノソナタの中でも特に規模の大きい作品です。

ピアノソナタ 第6番「戦争ソナタ」作品82 イ長調

第1楽章 Allegro moderato

ソナタ形式。荒々しい冒頭で開始されます。この冒頭の主題はフィナーレに大きな関連性があります。対照的に第2主題は抒情性のあるロシアの原始的な民謡的なメロディーで、感情的で激しいトッカータ風の展開部は軍隊の進軍を表しているとも言われています。

第2楽章 Allegretto

スケルツォを意識したマーチ。明るいがどこか冷たさの漂う作風は、プロコフィエフが得意としている手法の一つです。主題はロシア民謡のメロディーの変形とも見て取れます。

第3楽章 Tempo di valzer lentissimo

かなりテンポの遅いワルツ。非常に重く暗い曲調はいかにも戦争時代のプロコフィエフの精神を反映させたような楽章です。

第4楽章 Vivace

ロンド形式。イ短調で書かれたリズムカルな動きによって開始されます。第1楽章との関連性が極めて強く、途中の抒情的な部分では第1楽章で登場したモチーフがいくつか登場します。最後は力強さと興奮を増していき、クライマックスで4連続の変ホ音が象徴的に登場します。この4連続の変ホ音は「Vサイン」（モールス信号のV）を暗示しています。